

沖縄いきものマスター

増える外来種 変わりゆく生態系

1960年ごろ

1960年ごろの沖縄は、山には木々が茂り、低地では畠や水田が多く見られました。池や沼も多く、川も護岸工事などされずに自然なままで保たれていました。水辺にはさまざまな水草や水生植物が繁茂し、トンボ・タガメ・アメンボ・ゲンゴロウ・ミズスマシなどの多くの水生昆蟲や、メダカ・フナなどの淡水魚、エビ・カニ類、水鳥が生息していました。

現在

1970年ごろから、各地の水田の多くがキビ畑に変わり、河川はコンクリートの三面張りとなり、水辺環境は急速に変化しました。都市化が進み、山や森も住宅地や公園に変わっていました。その過程で環境の変化に弱い在来種は数を減らしました。一方で、米軍基地の影響や都市化に伴い、環境への変化や汚れに強い外来種が侵入・定着し、今では在来種に代わり外来種が身近な動物になっています。

外来種が在来種に与える主な影響

捕食

外来種が肉食動物の場合、在来種を食べてしまうという直接の被害があります。

A: オキナワトゲネズミ
←マングースに捕食され減少した

B: ウシガエル
昆虫や小動物など動くものは何でも食べてしまう→

C: オキナワオガエル
←ヤエヤマセマルハコガメは石垣島や西表島の固有種だが沖縄島に持ち込まれてリュウキュウヤマガメとの競争が生まれている。手前が雑種のカメ、奥がセマルハコガメ

遺伝子かく乱

セマルハコガメ
カメやヘビ類では在来種との間で中間雑種が生まれる事例が多く、純粋な在来種の遺伝子が大きく乱される可能性があります。

人への危害

有毒のタイワンハブやタイワンコブラは動物だけでなく人の間で中間雑種が生まれる事例が多く、純粋な在来種の遺伝子が大きく乱される可能性があります。

農作物への被害

モンシロチョウやタイワンシロガシラなどの外来種による農作物被害は、産業への悪影響が出る場合があります。

A: タイワンシロガシラ
↑在来ハブより毒性が高い
↑野菜や果物を食べてしまう

B: モンシロチョウ
↑大量発生でキャベツが大きな被害を受けた

生存競争

生存競争が激しい大陸で進化してきた大陸由来の外来種の多くは、一般に競争力が強い傾向にあります。逆に島の在来種は競争力が弱く、場所やエサをめぐる外来種との競争に負けて個体数が激減したり、時には絶滅してしまいます。

A: ミナミメダカ
←グッピー・カダヤシはミナミメダカを絶滅寸前まで追い込んだ

B: シロアゴガエル
生活スタイルが似ているオキナワオガエルを育かしている→

**写真 A: 沖縄県自然保護課「オキナワイキモノラボ」HPより
写真 B: 沖縄県西表野生生物保護センター提供
写真 C: 安座間安史氏提供**